

3. 事業報告

(1) 実践委員会

本事業を円滑に推進していくために、年間で3回の実践委員会を実施した。

◇第1回実践委員会【7月2日（月）15：40～16：40：一色中学校会議室】

第1回の実践委員会では、最初に事業内容に関する説明及び今後の事業計画について、事務局より提案した。「津波浸水想定区域外への避難訓練（案）」については、避難経路など、各委員が親身になって検討していただいたことで、活発な意見交換をすることができた。そして、生徒も保護者も地域住民も、避難方法についての意思統一が不可欠であることが確認された。

また、各校で作成した「緊急時対応マニュアル」の中の『地震・津波編』について、あらかじめ危機管理課内で修正したものを提案した。なお、本実践委員会において、一色地区内の学校を対象としたマニュアルの見直しを図ることとしたが、市内の津波浸水想定区域に位置する学校のマニュアルの基礎となることを期している。第1回の実践委員会では、意見交換の場は設けず、各委員からは後日意見をいただくこととし、その意見を踏まえ、第2回の実践委員会で検討することとした。



防災教育アドバイザーからの指導・助言

最後に防災教育アドバイザーから、次のようなご示唆をいただいた。

- ・小学生高学年・中学生は、災害前は防災実践者であり、防災発信者である。また、災害中は率先避難者となり、災害後は命の助け合いの中心となる。
- ・津波浸水想定区域外への避難訓練を実施している学校はあまり聞いたことがない。率先避難者となる中学生が実施することになるので、是非リアルな形で実施してほしい。また、地域の方を巻き込んで、中学生との顔合わせができるとういのではないかと。中学生のイベントで終わるのではなく、家庭・地域に広げていくことが最終目的である。子どもたちが動き、それが地域に広がったという手応えが得られるような取り組みになるとよい。
- ・実践委員会の場で、地域の方々から様々なご意見をいただくことができたことは、学校安全の事業を進めていく上でも大変意義のあることである。

◇第2回実践委員会【10月10日（水）15：40～16：40：一色中学校会議室】

第2回の実践委員会では、はじめに7月から10月における事業の経過報告を行った。その後、第1回の実践委員会での「津波浸水想定区域外への避難訓練（案）」に対する委員の意見を踏まえ、災害時の避難経路に近い形（よりリアルな形）となるように修正したものを提案した。近藤アドバイザーからは、「避難している最中に、危険箇所をチェックしながら訓練を実施できると、さらに中身の濃い訓練になるのではないかと」といったご示唆をいただいた。



実践委員会の様子

また、委員から事前に意見等をいただいていた各校（一色地区）の「緊急時対応マニュアル」についても再提案した。委員から多くの意見をいただいたことで、とりわけ津波発生時の避難のタイミングや教職員の対応など、様々な視点からマニュアルを見直すことができた。【付録資料参照】

一方で近藤アドバイザーからは、「小中学校が避難所となっているが、教職員が学校にいる時間は年間を通して小学校で4分の1、中学校で3分の1程度である。そのため、教職員が不在の場合も踏まえ、年に一度は地域・行政・教職員が防災の視点から施設（学校）見学会を実施することが必要である」とのご示唆をいただいた。

実践委員会終了後には、中核教員を対象として、各校で実施されている避難訓練の課題等について、近藤アドバイザーを交えて協議する場を設けた。中核教員からは、避難経路や避難のタイミング、教職員の対応などについて、それぞれの学校で抱えている課題等を積極的に出し合い、共有することができた。



各校の課題を出し合う中核教員

【中核教員より】

- ・避難訓練や防災に対する対応策などについて、新たな視点や具体的な取り組みについて紹介していただき、非常に参考になった。それらを踏まえ、自校で実践していきたい。
- ・「避難訓練は課題が出るのがよい」という言葉から、防災に完結はなく、考え続けていくことが必要であることが分かった。
- ・避難訓練の仕方がマニュアル化してしまうのはよくないと思っていたので、協議をしてすごく勉強になった。地震の揺れを3分以上にした方がよいなど、本校で早速取り入れたいと思うこともあった。また、避難する途中で津波警報が発表された場合など、起こり得る様々な想定を取り入れ、避難訓練を緊張感あるものにしていきたい。

◇第3回実践委員会【1月23日（水）15：40～16：40：一色中学校会議室】

第3回の実践委員会では、今年度のまとめとして、「成果発表会」で報告する内容について、実践委員から意見を伺う場を設定した。報告内容については特に意見は出なかったが、保育園児などの災害弱者に対するフォローについても検討していくべきであるといった意見をいただいた。そして、今後もこういった活動を続けていくことが大切であることを確認し合った。

また、第2回の実践委員会において話題となった「一色高等学校を指定避難所にする事」について、危機管理課より現状の市の考え（県からは浸水しない場所を指定避難所として指定するよう指示されていることや、浸水により孤立してしまう場所については避難者をなるべく最小限にとどめたいことなど）を伝えた。そして、改善の余地はあるものの、現状では、一色高等学校については「津波一時待避所」として活用していくという共通認識を図ることができた。

最後に、近藤アドバイザーから、「課題は山積しているが、実践委員会のような場で、結論は出なくても、問題点を出し合ったり共有し合ったりすることが大切である。今後も顔の見える関係、連携を図っていくことが重要である。そして、今回、一色地区で実施した取り組みを、できる範囲で継続してもらいたい。細くても長く続くように…」のご示唆をいただいた。



今年度の活動報告をしている様子